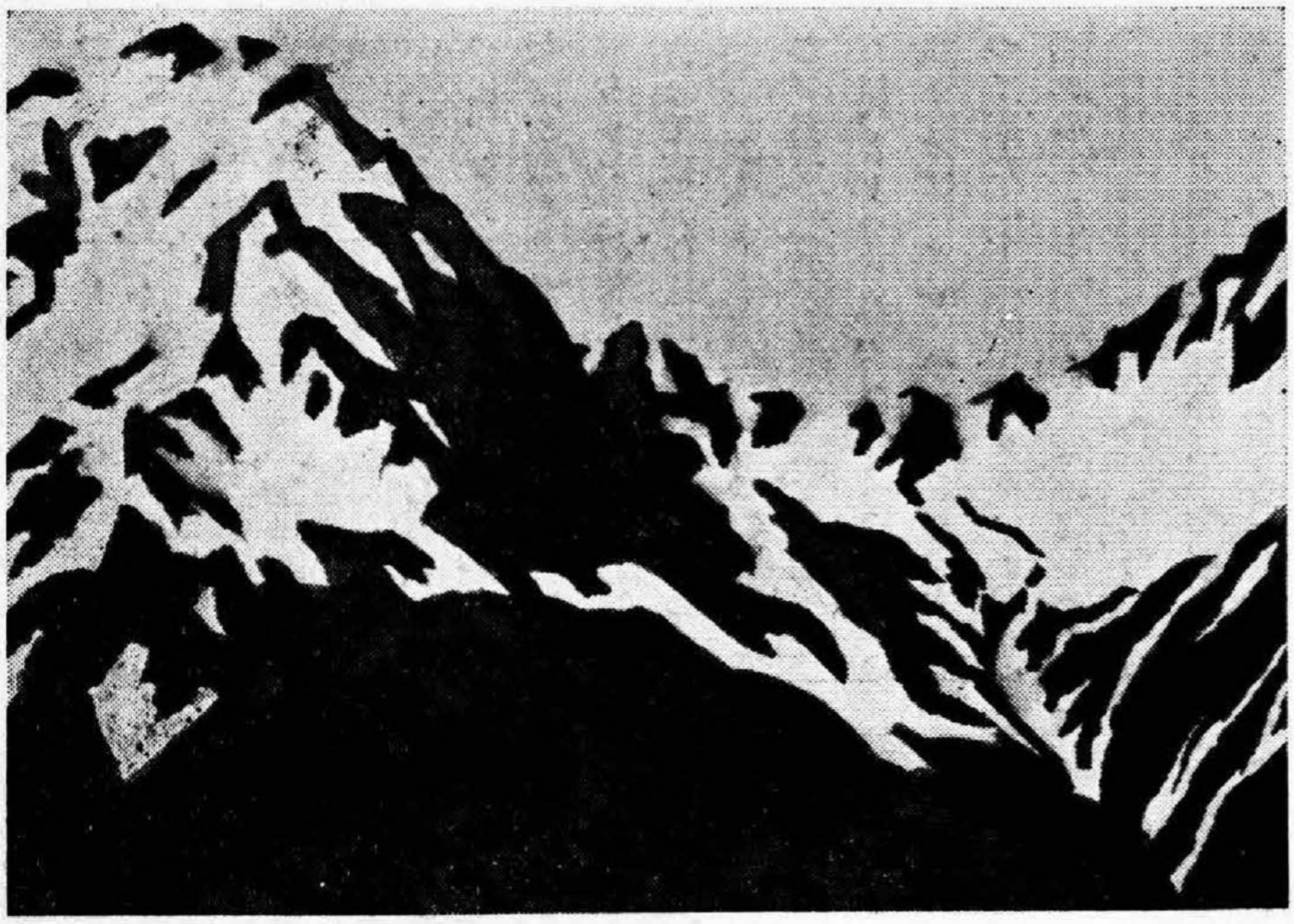

針葉樹會報
通卷第七十八號

槍ケ岳園碁行

シヨンチヤマ

關西に住んで早や二年半になる。サラリマン三年目、旦那様二年目の小生も、持つて生れた駄洒落癖とスロモは抜けない様だ。仕事上、算盤は速くなつた積りだが、他は推して知るべし。唯結婚丈けは我乍ら早過ぎた感があるが、續く建艦競爭にはどうも負けた様だ。そんな譯で一家の主ともなれば、さう山へも行けないだらう等と思つたら大間違ひ。これでも割に出掛けてゐる積りです。尤も關西は山らしい山が少く、何處へ行つても押すな押すなの人又人で、うんざりするが、無銭程恐ろしいものは無いさうで、結局日曜ともなれば六甲邊りをブラつく。その六甲の谷もあの水害で大分荒れた様だ。何千貫もあるさいふ呆れる程でつかい石がごろ〳〵住吉川や芦屋川の下流に轉つてゐるんだから、凡そ想像はつく。兎に角、朝夕眺める六甲の峯も、氣の故か大分痩せた様に思はれる。水害の御蔭で一日芦屋川の勤勞奉仕に狩り出され、兩手に澤山まめをこしらへた。休暇迄とつたのだが育ちがよいさこれだから困る。

さて、八月に瀧谷へ入ると言つてゐた小谷部も、住友の鐵鋼買付を一手に引受け文字通り金縛りの狀態で、さてもあきまへんらしく、是非同行をさ言つてゐたが、是非も急に斷つて來、止めようかさ思つたが、藥師の往き歸りに大阪に立寄つた門司のアラ氏に山氣分をそゝられたか、日曜を入れてやつさ四日の休を遣繰し久しぶりで穗高にでも行つて遊ばうさ、同僚N君を誘つて出掛けた迄はよかつたが。

大阪から神河内に入るのは一仕事で、夕方たつて、夜半名古屋で乘換へ、翌朝五時前に松本へ着くので、到底眠れやしない。河童橋へ降りると、どうも空模樣が氣に喰はない。雨しらす見たいのが出てゐやがる。西糸屋へ寄ると、穗高小屋が立派になつたさか、肩も山莊と改稱したからうちはロッヂ●ニシイトさでも言

ひますか等さ親爺と話し込み、十時頃ブラ／＼出掛ける。流石に登山者の姿も見えず、時々二人連れに會ふ位。德澤、一之俣さ一々油を賣つて、扨て槍澤の登りは今迄になく登りでがあるさ思つた。雪は勿論見えず、下草は薄く黄ばみ、實に靜かで、今頃に限る等さ言ひ乍ら、六時殺生に泊る。もう肩迄は殺生だし、それに風呂もあるさいふ譯だ。

翌朝あの剛慾さうな親爺の「では御氣をつけなすつて」の聲を後に、ガスを衝いて出掛けたが、中岳の裾を捲く邊りで霧小便は大粒さなり、ザーッさやつて來た。N君のリュックは浸水し始め下らうかさ相談したが、結局碁盤のある肩に行く事に一決。肩の山荘で衣類を乾かしてゐるさ降つた／＼物凄く降つた。すつかり安心して、目の消えかゝつた碁盤に向ふ。互先で而も白を握つた方が勝つんだから不思議である。肩さ翌日西糸屋で打つたのが十五回、よもや下界でもからは打つまい。終日降つて翌朝も雨模樣。起き拔けに一局やつてゐるさ、昨日穗高小屋から臍迄叩かれてやつて來た四十越したオッサンが、さも呆れ果てた樣に見てゐたが連れのアンちやん迄が古雜誌をめくつてゐるのに堪りかねたか、「おい雜誌なんか東京へ歸ればいくらでも讀める。外へ出ろよ。」さ引張り出した。彼等は今朝雨の大槍で萬歲を叫んで來たのに、何をしてゐるのだらう。外へ出て見たら小槍はどこだ／＼と騷いでゐる。濡れるので歸りかけると、「見えますよ、小槍が。」と實に嬉しさう、成程見えるには見えるが、ボーッさかすんでゐる。顏負けしてしまつた。

何時迄も止みさうもないので、新しい今田小屋の見られぬは殘念だが、十時頃下る。勘定書になんさ、「肩の山荘第〇號室」とうたつてある。ダアーッさなつた。國立公園だから、山荘的に改築せれば沒收されるさうだ。

ドン／＼槍澤を下つてゐると、ガスが薄れて時々青空が覗く。もう遲い。德澤で夕立にあひ、西糸屋にのびる。

次の日もはつきりしない天氣なので、あつさり晝汽車で歸る事にする。そのバスがたつた一台にいくらでも詰め込んで未だ入る／＼さ言ふので、「もう一台出せ」さ怒鳴つたが、根が優しいものだから何時ぞやのコンチャンの如き睨みが利かず、いさも情けない恰好で松本に着いた。松本は夏雲の浮ぶ全くいゝお天氣である。晝の中央線も暑くてやり切れない。車掌がいゝ加減な事を言つたのを眞に受けて、東洋一の名古屋驛は地下食堂街でいゝ氣持にメートルをあげてゐる中に、大阪へ十時頃着く櫻は出てしまひ乘つた鈍行は大阪へ十二時半、歸つて寢たのが二時。馬鹿らしいつたらなかつた。

降られに行つた譯ではないが、二人で五本持つて行つたフイルムがやつさ四五枚しか撮れなかつたのだから、想像して下さい。歸つて針葉樹會の連中に話すさ、降られるのは當然だ等さ言ふ。支那で大砲打つてゐるからに違ひないと思ふ。

九州だより

小林

九州に下る途中門司の堀岡氏さ會つた時から、大牟田の近ちやんの處へ行くことが、念願さなつてゐた。所が堀岡氏さ小生さが

都合よく、又近ちやんの方が都合よいと云ふ日がありさうでないから爲に、つい〳〵延び〳〵となり八月に持ち越されてしまつたのである。八月の二十七日堀岡さんから突然（さうでもないが）電報を貰つて、翌二十八日大牟田を訪れることになつた時は、矢張り何んと云つても嬉しかつた。クマソの發生地附近には語るに友もなく遊ぶに金もないと云つた有様なので、近ちやん、堀岡さんあたりの風丰に接して始めて人間並みの氣持ちを取り戻してゐる。

扨て日曜の朝九州本線の急行で午前十一時半に大牟田に着いた。近ちやんは親切にも出迎へに來てゐてくれる。大牟田はさてどんな處かと思つて街を見ながら行くと、成程綺麗ではない市の廻りを、ぐるりと取りかこんだ工場から白煙黑煙がもう〳〵と立ち上つてゐる。日曜でこれだから普通はもつとひどいかも知れない。染料工業所は煙の中に覆んでゐるやうなものである。體には どうしても良いとは思へない。然も暑い北九州よりもまだ暑い。市内電車と例のマツヤ百貨店があるのが取柄では、近ちやんがこぼすのも無理はないと思つた。晝過ぎ近ちやんの家へ落着き、風呂を頂いた時は漸くほつとした。之からは夕方迄如水會でやつてゐた様な馬鹿話しで時の經つのを忘れた。堀岡氏など學生時代と少しも變らぬ話し振りだから、御存知の方は皆ハハーと思ひ當るであらうやうな、話し方である。スキー場でなくてこの位だから之からもちよつとスキーには附合ひ兼れると思ふ程の勢で、門司の物產はARAさん一人が居ないと途端に儲けが無くなつちやうみたいである。

近ちやんに會つては大牟田も亦無い方が良いやうなもので總攻撃をやつて陷落させる。三人集まると日頃の鬱憤を一時に晴すので、話しの合間がない。アルプスの話しから五光岩の一件へ飛んで、出來れば冬御嶽に行きたいと云ふ邊で打止めとなる。又在京在阪の會員の活躍振りから例に依り孫さん重役になつた時は、矢張りと、近ちやんの獨壇上である。山岳部員の就職は保證する、すろと山岳部へ入れる時に試驗しなけりやならんと云ふ勢で遂に次の決議が公にされた。即ち近き將來、孫さんが重役になつたならその第一回のボーナスは何でも近ちやんが貰ふ約束になつてゐるさうである、それをそつくり針葉樹會へ債權讓渡すると言明したのである。だから堀岡氏と小生とは證人として、嚴然として頭に書き止めてをいた。すると近ちやんは宜しく活字にすべきであると云ふので敢へて會報に載せる次第で、之を以て最早や法的に動かすべからざる權利となつたやうでである。

次に大阪の松木さんが支店長になつた時にボーナスの半分かを出すことになつてゐるさうで、之も御同慶に堪えない。只近ちやんが課長になつた時のことは言明を避けたが、よもや判例以下の事は誓つてないと思ふ。之ではそのうち素晴らしい山小舍でも建つらしい。後から來る學生連は濡手で粟？で羨ましき限りである。啻、吳れ〴〵も不渡小切手にならないやうに針葉樹會の方々に祈つて戴き度い。

尙九月の末、二十四、五兩日、大學大阪軍が別府迄のしてくるさうで、之に我々三人が向へ伐ち一夕の歡をつくさうと云ふことになつてゐる。近くを御通りの節は是非御寄りを御願ひする次第。先づ右のやうな豐富な內容を盛つた第一回九州支部會は滯り

なく大牟田で行はれ、無事解散した。之からは年に何回となく博多あたりまで出張る豫定。殘暑烈しき折先輩諸氏の御健康を祈つて擱筆します。(一三・九・二)

(編註)—小林兄及九州の方々並びに全國の會員諸氏に申上げます。中川氏は最近營業部の統制課長に昇進されました。小林君の文中に見ゆる吾々一同待望の時も案外近く到來しそうです。

彌榮!彌榮!

木曾駒連峯を縱走せざるの記 (其の二)

E M P

茲でいよ〳〵敵のパーティーともお別れだ。紅茶を沸かしてゆつくり名殘の食事を終へる。休憩一時間半、敵身方互に握手を交して山運の長久を祈り、行つて來るぞと勇ましく、のんびりパーティー、ペン、EMP、三郎の三人は、尙も本流に沿うて棧道に惱まされるであらう敵と別れて、小屋のすぐ裏手の笹を分けて、ヂグザグの徑を喘ぎ登る。

Oh You'll take the low road,
And We'll take the high road.

だが併し、いづれが最初に伊那谷を見下すであらうか。

笹の密生した針葉樹林の中を氣持の良い小徑が電光形に登つて行く。いやな棧道の緊張から解放されて適度の勾配に愉快な程道が捗る。三十分足らずで相當廣い尾根に出る。稜線に二七七二米の獨標を有するハシゴダルの頭から大きく西南に張り出して、一六五二米の△を徑てぐつと南に折れ、東川谷の出合で終つてゐるのが此だ。陽は射さないが降りもしない。風がちつともなく蒸暑い。鳥の聲がちつとも聞えないのは一體何とした事だらう。

一六五二米の△の一寸手前で休憩。此時、ペンちやん徐ろに取り出したる四角い紙包み、何かと見れば、新宿で團體生命孃から貰つた例の一件だ。何が出るかと玉手箱でも開く樣に片唾を飲んで見守れば、現はれ出でたるはギツシリ詰つた美味さうな最中。有難く頂戴して、殘りは敵の爲大事にさつておく。

時計を見ると最早三時。だが北澤泊りなら今日はお早いお着きだと、△の南側を捲いて、背丈程もある笹やぶをこぎながら、足下の惡い陰氣な道を殆ど等高に進んで行けば、右手に北澤の流れが段々と近づいて來る。もうそろ〳〵トイジ谷の出合が見えてもいゝ筈だと、上流をすかして見ると、川筋が廣がつて、ぐつと高まつた白い川原がパツト明るく開けてゐる。

さ突如、今迄の徑が切れて、一條の赤ガレに行途を遮られた。幅五六米、如何にも生々しい感じで、下は斷崖になつてゐるらしく、川身は隱れて見えない。上を捲くのも大變らしいので、ペンちやん先づ之を斜上方にトラヴアース、皇帝之に續き、三郎は草付を五六米直登して後、水平にトラヴアース、渡り終へて見るさ、こは如何に、前のよりもずつと手强さうな幅七、八米位の奴がもう一本控へてゐる。兩方のガレに挾まれた馬の背に立つて見たがどこから手をつけて好いやら一寸閉口した。身の輕いペンちやんいつの間に渡つたのやら向ふのふちに立つて、路が無いよと云ふ。比較的凸凹のありさうな部分を見當をつけて、渡り終つて倒木を潛つた時には全くホツとした。全く無念無想の數分間だつた。

どうやら徑を發見したペンちやんの後を追つて、木の根、草の根を頼りに下りかけた皇帝、この時うつかり草の蔭に隱れて見えなかつた二貫目位の石を踏み落した。石は眞下に居たペンちやんの頭上目がけて音も無く落下する。アハヤと片唾をのむその瞬間の樹に當つてトントンと彈むでゐる間にペンちやん辛くも生命拾ひなして、一同安堵の胸撫で下した事であつた。

出合はそれから直ぐだつた。本流の川原が廣くぐつと盛り上つたあたり、まばらな樹の間を透して今宵の宿、北澤獵師小屋が見える。

幅五、六寸の薄板で葺いた屋根形の小屋の中には、川砂が流れ込んで盛り上つてゐる。極く最近誰か泊つたらしく、カレーの素や味噌など遺留されてゐる。

側の壞れた小屋の屋根板を貰つて來て、景氣の好い焚火に、晩めした終へる頃には、すつかり晴れ上つた夕空にチラリホラリと御星樣が見え初める。

砂の上に薄板を敷いて寢袋に這ひ込めば、漆黒のビロードに銀砂を撒き散らした樣な豪華な天井が屋根板を透してチラホラ目に入つて何とも云ひ樣のない好い氣持だ。

眼をつぶると、きつきの厭なガレの映像がハツキリ眼瞼に燒き付けられて伸々に消えない。快よい疲勞にいつしか三人は夢の世界に彷徨つて行く。(續く)

春の雲取小舍

柿原生

仙人はどうしてゐるだらう。そして又僕の最も愛する山小舍の一つである武州雲採の小舍は今どんなになつたらうか。春の目覺めの一夜を山への愛着を育んで呉れたあの小舍に過し度い。僕はそのため一人柳澤峠から三ノ瀨を通つて、將監の峠に立つた。

時折石楠花の微笑む曲折路を、大ダルの小舍から飛龍權現を過してトボ〳〵と歩いた。甲州雲取の小舍から雲取の頂に立つた時懷しい七ツ石の山肌が春の夕べの薄霞の中に見えてゐた。この下の村里では、山櫻の花辨がハラ〳〵と散り落ちても居やう。鴨澤の部落、落合の町のことも想はれた。

久方振りの雲取小舍は、相も變らずに夜近いたそがれ時に烟を立てゝゐた。仙人も居たし幾人かの登山者もゐた。見覺のある山斧や鐵砲もある。

自分は一人闇の中の湯桶につかつた。一日の春を巒山から此處に辿り來つた身の疲は、靜かにいやされて行く。幾年か前こゝにはこんな湯はなかつた。そしてそれよりも前には小舍も無かつたのだ。

原生林の小澤を求めて流れ落ちる清水は、倒木の下にセゝらいで行く。もう全く何も見えない。彼方の白岩山も暗い闇の中にある。しばらく仙人と話をした。そして自分は、安らかにこの小舍の片隅に脚を長く思ふ存分に伸して寢つた。ブツ〳〵と焚火が燃え落ちて行く音を聞き乍ら。

翌朝ノンビリ目を覺す。鳥が鳴き番犬が吠えてゐた。自分は外の登山者の出拂つた後、小ぎれいに掃かれた土間に立つて仙人と別れた。これからは白岩を越せば三峯だ、と過去の想い出が甦る。

白岩の小舍には一人爺さんが番をしてゐるだけだつた。この老人は三峯山の下の茶屋の主である。僕はこの老人が昔から好きでたまらなかつた。老人は茶をすゝめ乍らポツ〳〵と語つた。丁度滿洲事變の終る頃だつたので戰爭の話が始まつた時、

「わしも昨年暮に滿洲で悴を失くしましてな、後繼りもなくなりましたよ。」

と淋しく笑つて下をむくのだつた。

「それでも嫁が好い嫁でしてな、確り者でござんすから、俺もこうしてお山に來られます。」と言つて爺さんは茶をすゝつた。

皆んな戰爭の裡に生きてゐる。こんな山迄にも戰の波は寄せてゐる。僕はそう感じ乍ら、今晩も桝の木の中に寢る老人のことを淋しみ乍ら懷しい武甲山の姿を眺めつゝ御經平へと降つた。

(編註)—應召された謙坊が入隊直前、編者宛に送つてくれた原稿の中の一ッ。

くにたち

KANP

國立の部室で夏山報告會を兼ねて、現役連中が久振りに懇親會をやるさ云ふ。早速行くことを約して九月十七日夜懷しい部室を訪れた。僕の行つた時は報告も一通り終つて、皆の顏も幾分赤くなり出した時だ。半年來なくても部室はちつとも變りなく、僕達が居た頃の樣に林の中に丈夫に建つてゐるし、その中では相變らず現役の元氣な連中が山的な生活をしてゐる。夜が更けるにつれて、一人へり二人へりして去つていつたが、後にのこつた四人で以前よくやつた樣に疊の上にテントをかぶつてぐつすり寢る。しみぐ〳〵と學生時代に、山岳部時代にかへつた氣がした。翌十八日の朝食は例によつて志みづですませ、國立の驛で西と東に別れて僕は會社の連中と大岳の海澤に行つた。小ぢんまりした一寸良いこの澤も、やつてくる變ない連中のお蔭ですつかりぶちこはしだ。國立で切角いゝ氣分になつたのに、さえばかりがうらめしい。

山岳部報告（七月）

夏山記錄

(1)穗高涸澤合宿（七、一一—七、二一）

參加者、佐々木誠　鷲崎雄四郎　原鐵三郎　岩崎利一　大塚武里見治男　宮城恭一　山田亮三　久保孝一郎　小泉三郎　樫淵明

A、先發隊（岩崎　山田　久保）

十日に出發し、荷物の運搬、天幕の設立などを行ふ。雪が多くて、地均しが稍困難。

B、本隊（原　大塚　宮城　小泉　樫淵）

十三日に出發。

C、一般班（(2)參照）より、（佐々木　鷲崎　里見）

十二日出發、十六日德澤より入幕。

全員合宿開始は十六日夜より。

第一日（十七日）晴　全員行動す。

○北尾根（大塚　宮城）（里見　山田）前パーティーは四峰の側稜から登つた。

○チャンダルム（鷲崎　岩崎　久保　小泉）

○本谷より北穗高岳（佐々木　原　樫淵）北穗高に最も近い

コルに出で、涸澤コルより一つ手前の雪渓を下る。
久し振りの晴天に一同勇躍して、各方面に登高。
第二日（十八日）快晴　全員行動す。
○北尾根（佐々木　久保　樫淵）三峯の登りには練習の爲めザイルを使ふ。奥穂のお宮で休んでゐると霧の中から大塚のパーテイーが上つて來た。共に歸幕。
○北穂高側稜（岩崎　原　小泉）
○奥穂高岳直登　ヂヤンダルム（大塚　宮城　山田）
始めは飛騨尾根迄行くつもりであつたが、奥穂直下が手間取つたので割愛した。
○涸澤槍側稜（鷲崎　里見）比較的緊張した登高を行つた。
第三日（十九日）晴　休養
晴れわたつた圈谷の下で、スケツチなどしながら充實した一日を送つた。
第四日（二十日）快晴　全員行動す。
○瀧谷第二尾根、北山稜（オーダー大塚　佐々木　山田）
テント發（六・三〇）—北穂南北峯コル（九・〇〇）—第二尾根を下る—P3下（一一・一五）—トラバース—北山稜に取付く（一二・二〇—一・〇〇）—北穂頂上（三・一五）—歸幕（四・四五）—涸澤コル（七・二〇）—B・Cルンゼ出合（九・三〇—一〇・一五）—第二尾根は割合に平凡なので早目に北山稜に取付く。北山稜上部は傾斜急で一二箇所相當惡い所があつた。しかし快適な登攀であつた。
○北尾根（原　小泉）餘りに天氣が良いので、思ふさま寫眞を撮りつゝ、のんびり登る。
○奥又白池より前穂高岳（岩崎　樫淵）五六峯のコルから池迄は約三時間を要した。この行でもつて、池に置殘した荷物は皆無になつた。
○北穂高岳側稜（鷲崎　久保　山田）後のパーテイーは側稜の涸澤側の壁を登つて稜線へ。
打續く快晴に今日も大いに張切つた。
第五日（二十一日）晴　解散。佐々木　大塚　山田を殘し、他は全部涸澤を去る。
(2)一般班　燕、槍縱走（七、一三—七、一五）佐々木　鷲崎　里見
外一般參加者　本科二名　豫科八名
一般班は豫科部員の非常な努力によつて多人數の參加を見、種々なる點で有意義であつた。尙一般班は德澤小舍にて解散し、部員は翌十六日涸澤天幕に入つた。
(3)白出澤より槍見温泉、上高地（七、二一—七、二三）原　久保　樫淵　出發が遲れたので、槍見温泉には十二時頃着いた。
(4)涸澤生活（七、二一—七、二五）佐々木　大塚　山田
○二十二日　晴　Bルンゼを上り北穂高へ。
第三尾根を目指して出發したが、餘りに張切過ぎたせいかCルンゼと間違へてBルンゼを遮二無二登り、氣がついた時には既に瀧谷の核心から遠ざかつてゐた。一同口惜しがるも、かし決して無駄ではなかつた。
○二十三日　晴　涸澤槍側稜　下から見て右方の側稜を登る。
○二十四日　晴　瀧谷第三尾根
○二十四日（五・四五）—涸澤コル（七・二〇）—B・Cルンゼ出合（九・三發（五・四

○)—第三尾根下アンザイレン(一二・〇〇)—第三尾根に出る(一・〇〇—一・三〇)—T3(二・四五)—縦走路(四・〇〇—五・〇〇)—歸幕(六・〇〇)

第三尾根はP2の前後が興味の中心である。T3より上は思つた程悪くはなかつた。ツルムを中心とする第四尾根の景觀は誠に素晴しい。夜は星空の下でありつたけの薪を燃して涸澤最後の晩の名殘を惜しんだ。

(5)大瀧山、常念岳(七・二三—七・二五)里見　宮城

(6)安房峠より高山へ(七・二三—二五)小泉

其の他丹澤、八ケ岳等の記錄がある筈ですが、休暇中故揃ひませんから、今手許に達したものだけ御報告致します。

消息

五十嵐數馬君　廣島市白島東中町一四番地へ轉居。

船本　文治君　杉並區荻窪四ノ一〇二　福田方へ轉居。

定例集會

九月二十一日(水)於如水會館

出席者(會員)吉澤　增山　鈴木　新羅　望月(部員)佐々木　岩崎　原　船本　日江井　宮城

何だか珍らしく出席會員の少い集りであつた。過日麻布の聯隊へ柿原君を尋れていつた佐々木、森川兩君の話しによると、謙ちやんはいさも元氣に軍務に精勵、そして入隊した誰もが一番先にこぼす飯のことも、「殺生小屋のメシよりはうまいぞ」と云つてゐる由。その上射撃では五十點滿點の四十四點で拔群の成績さのこと。銃後の私共は大いに安心して可なりです。

近藤恒雄君歡迎針葉樹會　十月十二日(水)於如水會館

出席者(會員)近藤　渡邊　吉澤　村尾　金田　久保田　手塚　吉澤松　高瀨　園山　增山　清水　小柳　松浦　新羅　望月(部員)森川　佐々木　岩崎　原　船本　大塚　日江井

コンちやんが十月中旬上京すると云ふことは隨分前からわかつてゐて、東京の連中が等しく首を長くして待つてゐたのであつたっ此の日午後東京に着くや旅裝をさかるゝ暇もなく、外ならぬ山仲間の集りさあつて、そのまゝ如水館にやつて來られた。一同夕食を共にし、後例によつて中集會室に集り、コンちやん自慢のカメラにおさまつてから、クマさんの歡迎の辭に續いてコンちやんの九州のお話があつた。すつかり丸坊主になつた同氏は元氣ます〳〵旺盛で一寸應召勇士を彷彿せしめる。相變らぬ得意な話術さ、例の笑ひ聲さを以てしばし吾々を醉はせ、それからは何時もの雜談に移つて皆おそく迄腰をすえ、解散したのは十時を遙かにすぎてゐた。(尙マゴさんは神經痛を病まれて缺席。御快癒を御祈りします。)

編輯後記

今年は秋に二度も連休があるのに、比較的不順なお天氣で困つたものです。が遙かに聞きますれば、皆々樣相當に方々へ御出掛けの由。何卒簡單な消息乃至通信でも結構ですから、編者宛御知らせ下さい。山岳部の連中は秋には、奥又白、赤石方面、八ケ岳と中々張切つて居ります。スキー、冬山のシーズン迄のこり少い、紅葉の或は新雪の山々を心ゆくまで堪能なさるやう祈つてをります。(十月十五日)

針葉樹會報第九年第九號　昭和十三年十月二十日發行　(編輯　望月達夫)